Tulips University of Tsukuba Repository

〈論文〉「ひとり親」女性の「少女」性 : 津島佑子『光の領分』と マリー・ンディアイ『ロジー・カルプ』を中心に

著者	今野 安里紗
著者別名	KONNO Arisa
雑誌名	文学研究論集
巻	35
ページ	59-75
発行年	2017-02-28
その他のタイトル	〈Articles〉A Female Single parent as (fille): Yuko Tsushima's The Territory of Light and Marie NDiaye's Rosie Carpe
URL	http://hdl.handle.net/2241/00146018

要旨

「ひとり親」女性の「少女」性
—津島佑子『光の領分』と
マリー・ンディアイ『ロジー・カルプ』を中心に—

今野　安里紗

本稿では、津島佑子『光の領分』および、マリー・ンディアイの『ロジー・カルプ』を取り上げ、作中における「ひとり親」女性の登場人物のアイデンティティについて、フランス語の〈fille〉（若い女性・未婚女性・娘）と〈femme〉（女性一般・既婚女性・妻）ということばを端緒として考察し、その「少女」性について分析する。この二つの語は、女性の妊娠や出産、および婚姻など、男性との性的関係および、その子どもとの関係が、女性のアイデンティティを社会的に規定するものであることを明瞭に表している。作中の「ひとり親」女性たちは、その規範を逸脱するものでありながら、同時に、社会からは成熟した「母親」としての役割を求められており、その差異に葛藤する。本稿は、両作品に共通する、「ひとり親」の女性が、子どもの父親によって与えられた「家」を出るという物語に注目し、それを男性との性的関係によって規定される女性の社会的立場をめぐる問題ととらえ、そのような社会的規範に抵抗するものとしての「少女」（fille）性について明らかにするものである。

Abstract

A Female Single parent as〈fille〉:
Yuko Tsushima's *The Territory of Light* and Marie NDiaye's *Rosie Carpe*

Arisa KONNO

In YukoTsushima's *The Territory of Light* and Marie NDiaye's *Rosie Carpe*, the single parents leave from the houses that their children's fathers forced them to live in. This article examines, by referring to French words "fille" (unmarried and young woman) and "femme" (women, mature woman and wife), the conflicts these women experiences. These words, indicating the social position of women, signify that the identity of women is decided by the sexual relationships between men. However, the single mothers are unable to be defined either as "fille" or "femme". The society requires the female single parents to take the role of "mother". While the protagonists internalize this social rule, they feel resistant to it at the same time. This article will show that the identity as "fille" of the single parent the defiant attitude against the gender roles.

「ひとり親」女性の「少女」性

—津島佑子『光の領分』と マリー・ンディアイ『ロジー・カルプ』を中心に—

今野　安里紗

はじめに

津島佑子（1947-2016）の作品のうち、フランス語翻訳されているものは十作品[1]であり、フランスにおけるその受容は大きいものといえる。初めに仏訳が出版された作品は『寵児』（河出書房新社，1978 年）（*L'Enfant de fortune*, 1985）であり、女性作家の作品を多く扱うデ・ファム社（Des femmes）から出版されている。同社は、本稿で取り上げる『光の領分』（講談社，1979 年）（*Territoire de la lumière*, 1986）をはじめ、「ひとり親」家庭の母親を描いた津島の初期作品を五冊出版している。津島の作品全体についていえば、『夢の記憶』（講談社，1988 年）（*Album de rêve*, Seuil, 2009）を最後に仏訳の刊行はなされていない。以降の作品については、たとえば、遺作である『ジャッカ・ドフニ——海の記憶の物語』（集英社，2016 年）をはじめ、少数民族等をテーマとした作品群の紹介はフランスにおいて充分になされてはいない。とはいえ、津島はフランス滞在時に、2011 年にノーベル文学賞を受賞したジャン＝マリ・ギュスターヴ・ル・クレジオ（Jean-Marie Gustave Le Clézio : 1940-）の提案でフランスの学生と共に、知里幸恵（1903-1922）の『アイヌ神謡集』（郷土研究社，1923 年）の仏訳『銀の雫降る、降る——アイヌの歌』（*Tombent, tombent les gouttes d'argent :chant du peuple aïnu*, Gallimard, 1995）を手がけており、アイヌ文化および民族への関心がその作風に影響を与えたことは認識されている[2]。いずれにせよ、フランスにおける津島の位置付けとしては、日本の戦後を代表する女性作家であり、家庭や愛をめぐる女性のアイデンティティについて言及した作家ということになっている[3]。

津島の最初の仏訳が刊行された 1985 年、処女作『豊かな未来について』（*Quant au riche avenir*, Minuit）を発表したのは、当時 18 歳であったマリー・ンディアイ（Marie NDiaye : 1967-）である。ンディアイは『三人のたくましい女たち』（*Trois femmes puissantes*, Gallimard, 2009）[4]によってゴンクール賞を、また『ロジー・カルプ』（*Rosie Carpe*, Minuit, 2001）によってフェミナ賞を受賞した現代フランスを

代表する作家であるが、彼女もまた、女性の登場人物を中心に、人種や家族の問題におけるアイデンティティをめぐる作品を多く執筆している。

このように、津島とンディアイとは、生まれた国も年も異なっていながら、フランスにおける「デビュー」は同時期の、日本とフランスの両国それぞれにおいて高く評価されている作家であり、その作品のテーマ性には多分に共通するところがあるといえる。さらに、興味深いことに、作家自身の家族をめぐる経緯もまた、類似している。わずか一歳の時に父の太宰治を失った津島と、フランス人である母とセネガル人である父との間に生まれ、六ヶ月の時に両親が離婚し、母親に引き取られてパリに暮らしたンディアイとは、どちらも都会の母子家庭で育った〈娘〉であり、その体験を反映してか、両者の作品には父親の存在が希薄な家庭が多く描かれている。

本稿では、こうした共通性をもって、両作家の作品が比較するに値すると考えた上で、津島の『光の領分』(1979 年) および、ンディアイの『ロジー・カルプ』(*Rosie Carpe*, 2001) を取り上げ、「少女」性という観点から、両作品に登場する「ひとり親」の女性のアイデンティティについて検討する。

両作品はそれぞれ、「ひとり親」家庭の若い母親を主要登場人物としており、『光の領分』では語り手でもある〈私〉、『ロジー・カルプ』においては、タイトルと同名の人物であるロジー・カルプがそれに該当する。この二人の女性登場人物に共通しているのは、第一に、幼い子どもを抱えた二十代の若い母親であること、第二に、子どもの父親に精神的に依存していることである。父親は家庭の外におり、不在であるのにも関わらず、彼女たちを心理的に支配し、拘束している。その関係を最も表している状況として、二人は、どちらも、子どもの父親が決めた住居、あるいは彼らと「関係」がある住居に住んでおり、しかし彼らからの経済的援助を受けることなく、ひとりで育児をしているということである。彼女たちは「ひとり親」の女という、「不完全な母親」として周囲から咎められ、追い詰められていく。彼女たちはそのような状況を打破するために、やがては自分の子どもを連れて今までの「家」を去り、自分で決めた新しい場所へと向かっていくことになるのだが、その過程には「ひとり親」女性の社会的立場をめぐる問題がある。本稿は、それを妊娠と出産、および婚姻という、異性間の性的関係に基づく「女性性」の移行をめぐる問題ととらえ、「ひとり親」女性とその子ども、および子どもの父親との関係性に注目し、フランス語の〈fille〉(少女・未婚女性) と〈femme〉(女・既婚女性) という語を端緒として、「ひとり親」女性の「少女」性を明らかにするものである。

1.「ひとり親」の女性とは誰か

『光の領分』の語り手〈私〉は、保育園に通う幼い娘と、『ロジー・カルプ』の主人公であるロジーは生まれたばかりの息子のティティと、それぞれ、二人で暮らしている配偶者あるいは子どもの父親からの援助を受けずに子育てをしている母親である。このような、いわゆる「母子家庭」の母親を示すことばとして、現在の日本では、たとえば、以下にあげる総務省の調査においても「シングル・マザー」という語が用いられているが、フランスにおいては「シングル・マザー」に対応する語ではなく、性別によらない「ひとり親」〈monoparente（女性形）〉という語が用いられている。以下に詳しく述べるが、両国における「母子家庭」の状況や定義に違いがあるため、本稿では、「シングル・マザー」という語を避けて、「ひとり親」女性という語を用いる。本節（1.）では、実社会での日本とフランスの「ひとり親」女性の定義と実情について述べ、『光の領分』および『ロジー・カルプ』に登場する女性人物の状況と比較する。

1.1.　日本とフランスにおける「ひとり親」女性の定義と状況

日本においては、一般に母子家庭の母親のことを「シングル・マザー」と呼んでいるが、椎野若菜によれば、1980 年代に海老坂武の『シングルライフ――女と男の解放学』がベストセラーになったのち、「シングル」という語が一般に広まったとされる[5]。同時期には池上千寿子の『シングル・マザー――結婚を選ばなかった女たちの生と性』が刊行されており、「シングル・マザー」の語が使われている。また、国勢調査に基づく総務省統計局の調査においては、「シングル・マザー」は「子と同居している配偶者のいない女性」[6]として定義され、さらに「未婚かあるいは夫と死別・離別している母親と、その未婚の 20 歳未満の子のみからなる世帯」と、「その親子と他の世帯員からなる世帯」と定義されている[7]。なお、2005 年の同じ調査では、子どもの年齢を問わない代わりに、「子が年少と思われる 15 ～ 49 歳」[8]の母親という条件を採用しており、とりわけ若い女性の「ひとり親」が対象とされている。

他方、フランスでは「シングル・マザー」という語に対応するものとして「未婚の母」を表す〈mère célibataire〉という語があるが、性別やその経緯によらず「ひとり親」全体を指して〈monoparent〉という語が一般的な公的呼称である。その定義は、「ひとりの親と、ひとりあるいは複数の子どもで構成され、またその子どもが同居している家庭」[9]とされており、『ロジー・カルプ』が刊行された時期につい

ていえば、1999年の「ひとり親」世帯の数は、25歳以下の子どものいる家庭全体の45%ほどであり、婚外出生率比率は47.4%となっている[10]。また、2005年には、「ひとり親」世帯の数はさらに増えて50%を超えており、婚外出生率もやはり50%を超えている。フランスにおける家族形態はさまざまで、たとえば、婚姻を結ばずに、同棲を続けるカップルを「自由な結びつき」(union libre)[11]と呼び、またその間に生まれた子どもを「自然子」(enfant naturel)[12]と呼ぶ。その他には、男女カップルのみが交わすことの出来る婚姻に代わり、カップルの異性同性を問わず、社会保障などの権利を認める、いわゆる「パックス法」(Pacs = Pacte civil de solidarité)と呼ばれる「連帯民事契約」というパートナーシップ制度に登録するカップルも増えている(また、実際にパックスに登録しているのは、同性カップルよりも異性愛カップルの方が多数となっている)。つまり、「ひとり親世帯」(familles monoparentales)[13]や婚姻外に出産した子どものいる家庭とは、それらの多様な家族形態のひとつであり、決して珍しいものではない。

1.2. 本稿で取り上げる作品中の「ひとり親」女性について

上述の社会的定義と照らし合わせれば、『光の領分』に登場する〈私〉は、二十代と推測され、年齢および子どもの年齢については前述の条件を満たしているのだが、夫と婚姻関係を結んだまま別居しているので、「未婚」ではない。しかし、作中で〈私〉が、自身を「子どもの父親を失ってしまっている」[14]と説明しているように、心情的には「ひとり親」として自らをみなしていることが分かる。同時に、〈私〉は作中で自らを「ひとり親」や「シングル・マザー」などの特定の語で名指すことはない。『光の領分』の初出が、前述した「シングル」という語が一般に広まったとされる時期よりも少し前であることには留意すべきである。また、作者自身が『光の領分』についてのインタビューで、次のように答えている。

> 「妻」ということばに意味を与えるような書き方をしたくないんです。そういうことは今の時代では関係ないんじゃないかという気がするのね。現実がもっと流動的になっちゃっているから。「妻」とか「母親」とかいったところから何かが生じるということはどうもなさそうだし……。[15]

このように、津島は家族内における女性の立場や役割に名付けを行うことに対しては批判的な姿勢をとっている。つまり、「ひとり親」をめぐる呼称についても、特定の語の使用を避けている可能性があることも推測される。いずれにせよ、同イ

ンタビューにおいて津島が説明するように、主人公は「孤立しているようなタイプの人間」[16]であって、「シングル」という語のニュアンスに当てはまる状況にいる。

他方で、『ロジー・カルプ』のロジーも、作中で自らを「ひとり親」にあたるような語で呼ぶことはない。彼女は20歳で既婚男性との間に子どもを出産し、未婚のまま、子の父親とは別居しており、「母子家庭」というかたちで子育てをしているため、彼女が置かれている状況は、日本の「シングル・マザー」およびフランスの「ひとり親」(monoparent) の条件に当てはまるものである。

いずれにせよ、〈私〉とロジーとは、一人で育児をしている若い母親であり、婚姻の有無に違いはあるが、家庭内に配偶者あるいは子どもの父親が存在していないことは共通しており、また自身の両親などを含めた親族などとも離れて暮らしているため、「シングル」という孤立した存在ととらえることは可能である。しかし前述したように、作中人物について、「シングル・マザー」などの、いわゆる「ひとり親」を表す具体的な呼称を用いて説明されることはないため、本稿ではそのことに留意しつつ、「ひとり親」という語を用いて、作中の該当人物をそのように定義したい。

1.3. 「ひとり親」女性は〈fille〉か〈femme〉か？

前項（1.2.）で述べたように、婚姻やその他のパートナーシップ制度をめぐる状況は日本とフランスとでかなり異なっているが、配偶者がおらず、子どもと二人きりで生活している、という「ひとり親」の定義は両国ともほとんど同じであるといえる。後に詳しく述べるが、若い「ひとり親」の女性に向けられる周囲からの批判的眼差しに対する苦悩は、『光の領分』および『ロジー・カルプ』に共通して描かれている。その周囲からの非難は、彼女たちが異性間の婚姻関係を基準とした規範から逸脱した存在であることに向けられているといえよう。たとえば、『ロジー・カルプ』の中で、ロジーが未婚のまま妊娠していることについて、「[...] なぜなら、わたしは結婚もしていなければ、何の価値もない」([...] car je ne suis pas mariée ni rien [17]）ので、その話を兄のラザールに聞かせても喜ばないだろうと説明する場面がある。つまり、未婚女性が妊娠し、さらに出産して「ひとり親」となることは、「女性性」を規定する社会的規範の内部においては価値を与えられないものとされているのである。以下、フランス語の〈fille〉と〈femme〉ということばの定義を押えながら、婚姻を基準とする女性の社会的役割についての規範を確認する。

フランス語の〈fille〉ということばを辞書[18]で引くと、①「(息子に対する) 娘」、②「少女」あるいは「若い女性」、③「若く未婚の女性」等の意味がある。これに

対して〈femme〉ということばは、①「大人の女性」、②「女性（全般）」、③「（子ども、少女に対する）成熟した身体を持つ女性」、④「結婚している女性」、⑤「妻」等を表す。〈fille〉と〈femme〉との間にある大きな差異とは、「婚姻の有無」であり、〈fille〉は男性と婚姻関係（すなわち性的関係に基づいた対関係）を結ぶことによって、夫に対する「妻」であるところの〈femme〉へとアイデンティティが推移していくことになる。この場合、たとえば婚姻によって姓が変わるということに象徴されるように、〈fille〉は父親の「家」から、夫となる男の「家」へと移動する。また、〈fille〉では「女性一般」を表すことが出来ず、「妻」をも表す〈femme〉こそが、女性全体を表す語となっている。つまり、婚姻関係を結び、夫となる男性に従属する「妻」という立場になることが女性の「成熟」とみなされているのである。

それでは、「夫 - 妻」の対関係に位置付けられず、しかし妊娠と出産を経験しており、子どもを持っている「非処女」である「ひとり親」とは、〈fille〉と〈femme〉とのどちらに位置付けられるのだろうか。「ひとり親」女性とは、そのような二項対立を否定しうるかたちで、その二項対立の中に位置付けられない、疎外された存在であると考えられる。

『ロジー・カルプ』および『光の領分』に登場する「ひとり親」女性の共通点として、その年齢が二十代前半の若い女性であることをすでに指摘したが、若い女性を表す際、フランス語には〈fille〉を用いる場合と、「若い」という意味の形容詞を付けて〈jeune femme〉とする場合とがある。つまり、ロジーと〈私〉とは、〈fille〉と〈femme〉のどちらとも名付けられやすい年齢の女性であり、また、婚姻の有無が、必ずしも処女性の有無と等しく結び付けることが出来ないために、より一層その「女性性」は定義付けられないものとなっている。しかし、実際には「女性性」についての社会的規範が存在しており、〈私〉やロジーのような「ひとり親」女性は、その規範のもとでは例外として定義付けられてしまう。次節において、彼女たちが自認する女性性と、周囲から要請される理想の母親像との隔たりが、彼女たちの葛藤を引き起こすものであることを明らかにする。

2. 「理想の母親」像とその内面化による「ひとり親」女性の葛藤

2.1. 『ロジー・カルプ』におけるロジーの認識

『ロジー・カルプ』において、主要登場人物であるロジー・カルプは、商業高校を卒業後、ホテルの調理場で働くことになる。彼女は自分の上司である既婚男性・マックスと性的関係を結んで妊娠し、息子・ティティを出産する。マックスはロジ

一の妊娠を機に、妻との離婚をほのめかしてみせるが実行はせず、妻と同居したままである。一方、ロジーはホテルの社員寮を出た後、マックスに決められた通り、彼の友人が住んでいたというアパートに子どもと一緒に暮らし始める。つまり、ロジーは子どもを持つ母親とはなっても、マックスと婚姻関係は結ばず、「夫」(mari)に対する「妻」(femme) とはならない。

ロジー自身、作中で自らを〈fille〉と呼ぶことが多く、〈femme〉と自称することは少ない。たとえば、以下に引く一節は、彼女が自らをどのような立場として位置付けているかを明瞭に表している。

> でも、わたしには可能な限りのすべての援助を得る権利があるの。だってわたしは驚くべき予兆と超自然的な現象に打ちのめされたかわいそうな娘なんだもの。わたしのような、子どものことで手いっぱいの娘たちが、気が狂って、狂暴にならないように、国が手を差し伸べてくれるのよ。
>
> (Et cependant j'ai droit à toutes les aides possibles, car je suis une pauvre fille accablée de signes prodigieux, de manifestations surnaturelles. Les filles comme moi, envahies d'enfants, l'Etat les soutient à bout de bras plutôt qu'elles deviennent folles et brutales.) [19]

ロジーの言う、「わたしのような娘たち」(filles comme moi) とは、「驚くべき予兆と超自然的な現象」(signes prodigieux, de manifestations surnaturelles) である望まない妊娠の後、出産をし、一方的に育児を押し付けられた未婚の若い母親のことである。ここでの〈fille〉とは、その「処女」性を指す字義とは異なり、母親になった若い女性たち、つまり「処女」性を失った若い女性であり、そうであれば、〈jeune femme〉という語に代替することも可能なはずである。しかし、ロジーは自らのことを、子供を庇護する「母親」という「成熟した女性」(femme) ではなく、他者からの援助を必要とする、未熟で「かわいそうな娘」(une pauvre fille) として、つまり自立が困難な社会的弱者としてみなしている。こうした弱者としての〈fille〉とは、マックスによって性的かつ、経済的に搾取されている「女の子」(fille) [20]ということばにもよく表されているといえる。

2.2. 『光の領分』における〈私〉の認識

ロジーが未婚の母親であるのに対し、『光の領分』の主人公である〈私〉は、藤野という男と結婚している若い母親である。藤野は、自身が経済的に自立していな

いことを理由に、婚姻関係を結びながらも〈私〉と別居しており、愛人と暮らしている。藤野は別居するにあたって、〈私〉の引っ越し先を決めてしまうが、当初の〈私〉は、それに対して、「自分の住む場所なのだから、自分で選びたかったのに、とは思わ」[21]ず、むしろ「一人の男に引き摺られて行く快感」[22]を覚える。やがて、藤野の身勝手な態度に疑問を抱くようになった〈私〉は、その部屋を出て、自分ひとりで決めた住居に子どもと移り住む。しかし、その新居は奇しくも、夫の名前、すなわち〈私〉の姓と同名の「フジノビル」というビルの一室であり、はじめはそのことを「偶然」[23]の一致だと考えていた〈私〉が、物語終盤で「私はビルの名前にも、自分自身の夫との深いつながりを感じ、それに身をまかせてみようと思っていたのかもしれなかった」[24]と回想するように、「夫」に従属する「妻」として、〈私〉が自らを位置付けていたことが分かる。一方で、物語の序盤で「夫として私に立ち向かう藤野の口調は、わたしに、最早、違和感しか与えなかった」[25]というように、自らを彼の「妻」として位置付けることに抵抗を覚えてもいた。

作中で〈私〉は繰り返し夢を見るが、夢の中で、彼女は常に未熟な母親・妻として周囲から責められ続ける。ある夢では、彼女の中学時代の同級生の少女が現れる。「哀し気に首を横に振り、立ち去って行った同級生は、昔のままの美しい少女だった」[26]と語るように、〈私〉は自らをすでに「少女」ではないもの、あるいは「少女性」を喪失したものとしてみなしている。つまり、彼女はすでに「少女」(fille)ではないと自認していながらも、「母性（非処女性)」を含んだ「妻・女」(femme)としては「不完全な」存在であると自らを位置付け、周囲もそのことを責めているように感じ、苦悩するのである。

2.3. 「理想の母親」像とその内面化

『ロジー・カルプ』におけるロジーの妊娠をめぐって、そのキリスト教イメージについて論じているポーリーヌ・イートン（Pauline Eaton）は、社会が女性に要請する「理想の母親」像が「ひとり親」女性を追い詰めており、その「理想の母親」像が「聖母マリア」信仰に由来するものであると指摘している[27]。聖母マリアは、婚約者であったヨセフとの婚姻関係を結ぶ前に、聖霊によってイエスを身ごもり、そのことを受け入れるが、実在の「ひとり親」女性もまた、「父」を不在としたまま、自分の妊娠を受け入れ、その責任を一人で負う事を社会から求められており、また本人もその理想の母親像を内面化してしまうというのである[28]。つまり、現代フランスに生まれたロジーは、そのイデオロギーの中で育ち、その規範を内面化しているといえる。明治以降の日本もまた、キリスト教文化に基づく西欧由来の近代的な

家族像および、女性像を受け継いでいるため、ロジーと年代は異なってはいるが、『光の領分』の〈私〉も同様に、「理想の母親」像を内面化していることになるだろう。たとえば、〈私〉が夢の中で「藤野との子どもをためらいなく産んだ自分に、私はこれからもずっと責任をとらなければならないのでしょうか」[29]と問いを発した時、「数え切れないほどの人影がまわりに現われ、さかんに頷きはじめた」[30]という場面は、社会が母親に求める役割というものを、〈私〉が内面化していることを示している。

また、イートンは、聖母マリアがイエスの母親になることによって神格化されたように、子どもが母親の「アイデンティティ」そのものとしてみなされることを指摘している[31]。つまり、出産し、子どもを持った女性は「母親」という役割を与えられ、それに固定されてしまうというのである。同様のことは、『光の領分』においても観察することができる。たとえば、菊田均が指摘しているように、『光の領分』において、〈私〉の娘が隣家の屋根に物を落とし、その家の老人に、〈私〉が子どもと一緒になって同じことをしたのではないかと責められる場面では、母親と子どもが周囲によって同一視される。菊田は、そこで〈私〉が老人に抗議するにあたって、「[...] 自分と子供とを同一視する隣家の老人に対して自分と子供との距離を証明しようとしている。自分は自分であって娘ではありえないことを「私」は主張しているのだ」[32]と論じている。

この場合、問題となっている「母親性」とは「女性らしさ」の一つであり、結婚した女性である「妻」を表す〈femme〉ということばは、そこに期待された「母性」を含んでいるといえるだろう。つまり、「ひとり親」女性に期待されている社会的役割とは、〈fille〉ではなく〈femme〉なのである。

3. 「母性」の象徴としての「子ども」

ロジーと〈私〉という二人の若い「ひとり親」女性は共に、男性との性的関係あるいは婚姻の後、妊娠し出産したことによって自分のアイデンティティが〈fille〉(自分の父親に従属する娘、未婚の女性)から〈femme〉(夫に従属する女、あるいは妻)に推移していこうとすることに、抵抗を感じているといえる。この場合、彼女たちを〈femme〉へと移行させようとするものは、先に述べたように、出産と子どもの存在によって与えられる、「母親性」である。

『光の領分』と『ロジー・カルプ』において、女性登場人物の子どもたちの苗字はそれぞれ父親のものとなっている。『光の領分』では、〈私〉の娘の名前は明かされず、常に〈娘〉として表記されているが、苗字については、母親である〈私〉が

夫の姓である藤野を名乗っているため、〈娘〉もまた同じ姓であることが推測される。『ロジー・カルプ』では、ロジーの息子であるティティは、その父親であるマックスによって認知された子であり、「[...] もはやロジーの姓ではなく、しかしマックスとその妻の苗字」([...] ne portait plus le nom de Rosie mais celui de Max et de sa femme[33]) を名乗っていることが分かる。つまり、ここでの「子ども」は、父親を中心とする「家」に所属する存在とされているのである。この場合、「子ども」の存在を通じて、「ひとり親」女性は、子どもの父親である男性と結び付けられる。「ひとり親」女性たちは、その男性の「妻」(femme) として、たとえ男たちが家庭において不在であったとしても、たえず男性との対関係に結び付けられるのである。ロジーの言う「ティティの醜い苗字はなんだっけ？」(Quel est le vilain nom de Titi ?[34]) という台詞には、子供の父親とその苗字に表された「家」に対する嫌悪感がはっきりと示されているし、他方『光の領分』の〈私〉は、「娘の顔は父親に似ている」[35]として、その身体的特徴に、不在の「夫」の姿を見つけ、未だに「夫」が自分を支配していることに苛立つ。

彼女たちは子供の死を願い[36]、育児から解放されることを願っているが、それは同時に、「母」という役割を一方的に押し付けられることに対する抵抗感であるといえるだろう。このような「母」である女性に期待されているのは、前述の通り、子どもを純粋に慈しむ存在として表象される聖母マリア像に由来する、男性中心社会の中で理想化された母親、すなわち「一人前の女性」(femme) の姿である。しかし、育児放棄をしてしまうロジーや、子どもをぶってしまう〈私〉とは、一人で育児を抱えきれなくなった母親の姿であり、その生活は都会の中の小さな「部屋」の中に隠されていて、外からは見えず、彼女たちは一層「家」の中にとらわれて孤立していく。彼女たちは社会的な規範から逸脱した存在として、疎外されていくのである。それを打破する方法として、この二人の女性は「家」を立ち去ることを選ぶ。

4. 理想化された「女性」性への抵抗としての「少女」性

ロジーはマックスが別の女性と再婚したのを機会に、住んでいたパリのアパートを発ち、息子の手を引いて、フランス海外県のグアドループ（西インド諸島）へと旅立つ。その後、ロジーは毒物を食べて瀕死の状態に陥った息子を放置してしまうのだが、それを現地に住む裕福な黒人青年・ラグランが助ける。物語終盤で、ロジーはラグランに一方的に望まれて結婚することになるのだが、彼女は彼に対して「妻」として振舞うこともなければ、「夫」の役割を相手に求めることもしない[37]。

もはやロジーは、「母親」や「妻」という、「家の中にいる女性」に期待される全ての役割を放棄するのである。すでに老女となって息子の家族と暮らしているロジーは、「とても長く、ほとんど全体が灰色になった髪をしており、その顔はほとんど皺もなく、まるまるとしていて、髪と同じ色をしていた」(Elle avait les cheveux très longs et presque entièrement gris, le visage plein, à peine ridé, de la même teinte que les cheveux [38]) と描写される。また彼女は、「形らしいものもない青い服を着ていた」(portait des vêtements sans forme, bleus [39]) と形容される。長い髪と皺の無い顔、そして体の線が分からない服とは、まるで子どものような様子であり、〈fille〉に表される「少女」のような雰囲気がある。尾崎翠、野溝七生子、森茉莉における「少女性」について論じた江黒清美は、「少女」と「老女」はどちらも「再生産につながらないセクシュアル・アイデンティティを共有し、それゆえ裏を返せば、性的支配に翻弄されない自由な存在」[40]であると指摘しており、ロジーも〈fille〉(少女) そのものではないが、「少女」性を保つことによって、理想化された「女性」〈femme〉への転換を迫られることに抵抗したといえよう。

他方で、『光の領分』の〈私〉も、夫と正式に離婚した後、「フジノビル」を出て、別のアパートへと引っ越す。そのことに象徴されるように、「藤野の妻でありながら、自分が生き続けることになるのかもしれない、とぼんやり、諦めの気持を持ちはじめていた」[41]と振り返る〈私〉は、藤野に従属する「妻」としてではない自分の女性としての立場を求めていた。そして、離婚後、自分の苗字を旧姓に戻すことを通じて[42]、自分の立場を夫とは切り離して独立させ、同時に、父親と同じ苗字を名乗る〈fille〉(娘) となるのである。さらに、この場合、〈私〉は幼少期に父親を失っているため[43]、父親による支配を受けにくい状態にある。こうした状況において「私自身を世帯主とする、新しい戸籍を作った」[44]とき、〈私〉は、自分以外の誰かから与えられた「家」を出て、その立場を自ら決定していくことになるのである。また、育児を放棄していたロジーに対して、〈私〉は自分で決めた新居に娘と二人で暮らしていくことを決意している[45]。つまり〈私〉は「少女」性を保ちながら、自分が「母親」であることを肯定しているのである。〈私〉は、夫・家に従属した「妻」でなくとも、「ひとり親」女性には子どもを育てて行く資格が十分にあり、それを成し遂げることこそが、自己の自立と解放につながるものととらえている。〈私〉は、「少女」性を保った「ひとり親」として、自らのアイデンティティを構築しているのである。

おわりに

スザンヌ・エスマン（Suzanne Esmein）は『光の領分』の仏訳に寄せた批評の中で「[...] シングル女性に対してしばしば向けられる、周囲からの、ひどく冷淡で厳しい、そして彼女の自立を妬む眼差しは至る所にある」（[...] il y a l'omniprésent regard, sur la femme seule, d'un voisinage le plus souvent insensible, dur, envieux de son indépendance.[46]）と言及している。その「眼差し」を内面化する「ひとり親」女性たちは、自身が社会的規範から逸脱した存在であることへの後ろめたさを抱えている。『光の領分』および『ロジー・カルプ』において、「ひとり親」女性たちの苦悩は、経済的な問題をその要因の一つとして含んでいる。しかし、作中で重点的に描かれているのは、社会からの「眼差し」に対する彼女たちの戸惑い、つまり心情的な問題である。作品の形式に注目すれば、『光の領分』では、〈私〉という一人称を用いて、その内面を詳しく記述している。一方で、三人称で語られる『ロジー・カルプ』については、『光の領分』が保育園の送迎の場面など子どものいる生活や周囲との葛藤を写実的な手法で描いていることに対し、ロジーと幼い子どもの生活はほとんどアパートの中に限定され、またその生活のリアリスティックな描写もなく、息子の台詞も記述されない。つまり、その曖昧な現実社会との関わりに対して、ロジーの内面描写が前景として立ち上ってくるのである。

『光の領分』が執筆された70年代後半の日本と比べ、『ロジー・カルプ』が執筆された当時のフランスは、はるかに家族給付制度および育児親休業制度などが充実しており[47]、ロジーは支援を受けることが十分に可能な状況にいると考えられるが、それらを一切受けずに孤立している。要求すれば手にすることの出来る支援を受けようとはしていないのである。そのようなロジーの描き方は、ロジーの抱える経済的な問題が、相手の男性に対する依存や従属と結びついており、その男性との関係のほうがより根深い問題であることをより明らかにしている。つまり、「家」という場所と、そこで与えられる「母親」としての女性の役割に拘束され、自分以外の何者かに常に従属し、無力化した状態であることを強いられるという問題である。しかし、誰かの「妻」（femme）ではない「ひとり親」の女性登場人物たちは、社会から一方的に期待される役割に抵抗する存在なのである。

また、彼女たちの姓に注目すれば、離婚後の〈私〉は父親の姓を名乗り、ロジーは、終始、父親の姓である「カルプ」を名乗っている。つまり、彼女たちは「子どもの父親」の姓を名乗る〈femme〉（妻）に対して、自分の「父親」に従属する〈fille〉（娘）であるということができる。そのことによって、彼女たちは自らを、子どもの父親である男性と切り離すことが出来る。〈fille〉という立場もまた、「父親」と

いう男性によって与えられる立場であることには留意する必要があり、ロジーと〈私〉という二人の「ひとり親」女性は、それぞれその在り方は異なっているが、いずれも「少女」性を保ち続けることによって、男性との性的関係によって規定される〈femme〉への移行を拒む。そのとき、彼女たちは、自らのアイデンティティを〈fille〉として、自分の意思で定義しているのである。

以上、「ひとり親」女性と、その子どもの父親である男性との関係を中心に「ひとり親」女性の「少女」(fille) 性について考察したが、すでに述べたように、〈fille〉という語には「娘」の意味も含まれており、その〈fille〉性をとらえようとすれば、その女性の母親および父親との関係についての分析も必要である。この点については、別稿にて取り上げることとする。

注

1　本文中で取り上げた以外の津島佑子の作品の仏訳は以下の通りである。『火の河のほとりで』講談社, 1981 年. (*Au bord du fleuve de feu*, Des femmes, 1987)『黙市』新潮社, 1988 年. (*Les Marchands silencieux*, Des femmes, 1988)『夜の光に追われて』講談社, 1986 年. (*Poursuivre par la lumière de la nuit*, Des femmes, Gallimard, 1990)『山を走る女』講談社, 1980 年. (*La Femme qui court dans la montagne*, Gallimard, 1995)『大いなる夢よ、光よ』講談社, 1991 年. (*Vous, rêves nombreux, toi, la lumière !*, Picquier, 2001)、『風よ、空駆ける風よ』文藝春秋, 1995 年. (*Ô vent, ô vent qui parcours le ciel*, Seuil, 2007) また、2011 年に起きた東日本大震災をめぐるアンソロジー『地震列島』(*L'archipel des séismes : Ecrits du japon après le 11 Mars2011*, Picquier, 2012) に収録された作品として、「ヒグマの静かな海」(La mer tranquille de l'ours brun) がある。

2　アイヌの謡曲と津島のエクリチュールの関係については、たとえば以下の様な資料がある。« La lumière noire de Tsushima », *Le Monde*, le 14 mars 1997. « Yûko Tsushima, écrivaine japonaise, est morte à l'âge de 68 ans », *Le Monde*, le 25 mars 2016.

3　« Yûko Tsushima, écrivaine japonaise, est morte à l'âge de 68 ans », *Le Monde*, le 25 mars 2016.

4　邦訳は小野正嗣によるものがある。『三人の逞しい女』早川書房, 2012 年.

5　椎野若菜編『シングルの人類学 I ――境界を生きるシングルたち』人文書院, 2014 年, p. 12.

6　西文彦「シングル・マザーの最近の状況 (2010)」総務省統計局ホームページ, 2012 年 7 月.
http://www.stat.go.jp/training/2kenkyu/pdf/zuhyou/single4.pdf　最終閲覧 2016/12/30

7 *Ibid*.

8 西文彦，菅まり「シングル・マザーの最近の状況 (その 1)」『統計』2006 年 1 月，日本統計協会.

9 フランス国立統計経済研究所 (Institute National de la Statique et des Études Économiques) による定義。« Une famille monoparentale est formée d'un parent et d'un ou plusieurs de ses enfants qui ont la même résidence principale. » (INSEE PREMIÈRE, 2008.)

10 *Ibid*.

11 舩橋惠子「フランスの家族――新しい絆（きずな）を模索する社会」『家族社会学研究』23 号，静岡大学，2011，p. 210.

12 *Ibid*.

13 *Ibid*.

14 津島佑子『光の領分』講談社文芸文庫，1993 年，p. 63.

15 菊田均，津島佑子「インタビュー・十二月　津島佑子氏にきく」『すばる』，1979 年 12 月号，集英社，p. 312.

16 *Ibid*., pp. 314-315.

17 Marie NDiaye, *Rosie Carpe*, Minuit, 2001, p. 12. (マリー・ンディアイ，小野正嗣訳『ロジー・カルプ』早川書房，2010 年，p. 17.) 同テクストからの引用の際、既訳を参考として新たに訳出した。

18 *Le Nouveau Petit Robert de la langue française*, Le Robert, 2009.

19 *Rosie Carpe*, p. 17.（邦訳，pp. 13-14.）

20 マックスはポルノビデオを作成するためにロジーと性行為をし、それを売って金銭を得ている。また、彼の女性観がよく表れている箇所として次の一節が挙げられる。「[...] 女性という存在を、それを社会的価値あるいは特別な誘惑能力としかみなしていない彼［マックス］が、 というカテゴリーに向ける表情のない大げさな笑み」(le large sourire inexpressif qu'il [Max] adressait à la catégorie des filles, ne prenant en compte que l'importance sociale ou la particulière capacité de séduction pour envisager l'existence possible de femmes）*Rosie Carpe*, p. 173.（邦訳，p. 173.）

21 『光の領分』，p. 20.

22 *Ibid*.

23 *Ibid*., p. 233.

24 *Ibid*.

25 *Ibid*., p. 46.

26 *Ibid*., pp. 48-49

27 Pauline Eaton, «Rosie Carpe and the Virgin Mary: Modelling Modern Motherhood? », *Religion*

and Gender, vol.6, issue 1, Utrecht University Library Open Access Journals, 2016, p. 30.

28 *Ibid*., p. 34.

29 『光の領分』, p. 46.

30 *Ibid*.

31 *Ibid*., p. 34.

32 「インタビュー・十二月　津島佑子氏にきく」, p. 314.

33 *Rosie Carpe*, p.143.（邦訳, p. 143.）

34 *Ibid*.

35 『光の領分』, p. 115.

36 *Ibid*., p. 117.

37 *Rosie Carpe*, p 387.（邦訳, p. 394.）

38 *Ibid*.（邦訳, 同頁.）

39 *Ibid*.（邦訳, 同頁.）

40 江黒清美『「少女」と「老女」の聖域――尾崎翠・野溝七生子・森茉莉を読む』學藝書林, 2012 年, p. 262.

41 『光の領分』, p. 221.

42 *Ibid*., p. 233.

43 *Ibid*., p. 193.

44 *Ibid*.

45 *Ibid*., p. 127.

46 Suzanne Esmein, « Femmes seules », *Le Monde*, le 31 octobre 1986.

47 フランスでは、戦後の女性の社会進出などを背景に、1976 年に「ひとり親手当」（API : L'Allocation de parent isolée）を導入している。また、1977 年に「認定保育ママ」（assistante maternel agréée）の制度が確立されており、1990 年には「認定保育ママ」を雇用している親への援助が制度化された。また「子ども契約」（contrat enfance）の制度は、自治体を通じての経済的支援となっている。

参考文献

江黒清美『「少女」と「老女」の聖域――尾崎翠・野溝七生子・森茉莉を読む』學藝書林, 2012 年.

神尾真知子「フランスの子育て支援――家族政策と選択の自由」『海外社会保障研究』160 号, 2007 年 9 月, 国立社会保障・人口問題研究所, pp. 33-72.

菊田均, 津島佑子「インタビュー・十二月　津島佑子氏にきく」『すばる』1979 年 12 月号,

集英社，pp. 312-315.
黒井千次「〈私〉の住む場所——津島佑子『光の領分』を読む」『文藝』1980 年 2 月号，河出書房新社，pp. 240-245.
椎野若菜編『シングルの人類学 I ——境界を生きるシングルたち』人文書院，2014 年.
津島佑子『光の領分』講談社（講談社文芸文庫），1993 年.（TSUSHIMA Yûko, *Territoire de la lumière*, traduit par Anne et Cécil SAKAI, Des femmes, 1986.）
縄田康光「少子化を克服したフランス——フランスの人口動態と家族政策」『立法と調査』297 号，参議院常任委員会調査室，2009 年 10 月，pp. 63-85.
西文彦「シングル・マザーの最近の状況（2010）」総務省統計局ホームページ，2012 年 7 月. http://www.stat.go.jp/training/2kenkyu/pdf/zuhyou/single4.pdf　最終閲覧 2016 年 12 月 30 日
西文彦，菅まり「シングル・マザーの最近の状況（その 1）」『統計』2006 年 1 月号，日本統計協会，pp. 73-77.
舩橋惠子「フランスの家族——新しい絆（きずな）を模索する社会」『家族社会学研究』23 号，静岡大学，2011 年，pp. 209-218.
ンディアイ，マリー，小野正嗣訳「マリー・ンディアイ会見記」『すばる』2007 年 12 月号，集英社，pp. 263-273.
————，小野正嗣訳『ロジー・カルプ』早川書房，2010 年.（NDIAYE Marie, *Rosie Carpe*, Minuit, 2001.）

CHARDON Olivier, DAGUET Fabienne, VIVAS Émilie, « Les familles monoparentales : des difficultés à travailler et à se loger », *INSEE PREMIÈRE*, no.1195, INSEE, 2008.
EATON Pauline, « Rosie Carpe and the Virgin Mary: Modelling Modern Motherhood? », *Religion and Gender*, vol.6, issue 1, Utrecht University Library Open Access Journals, 2016, pp. 29-46.
ESMEIN Suzanne, « Femmes seules », *Le Monde*, le 31 octobre 1986.
RABATÉ Dominique, *Marie NDiaye*, Textuel, 2008.
« La lumière noire de Tsushima », *Le Monde*, le 14 mars 1997.
« Yûko Tsushima, écrivaine japonaise, est morte à l'âge de 68 ans », *Le Monde*, le 25 mars 2016.
Le Nouveau Petit Robert de la langue française, Le Robert, 2009.